

第3回 小松島市立小学校再編有識者会議 会議録（要旨）

【概要】

1. 日 時： 令和3年3月19日（金） 午前10時～午前11時35分
2. 場 所： 小松島市生涯学習センター 3階 視聴覚室
3. 参加者： **【委員】** 秋山和雄委員、東孝行委員、小川宏樹委員、葛上秀文委員、坂口敏司委員、中野晋委員、長谷部一喜委員、前田洋一委員、松村豊大委員
【小松島市】 中山市長、坂野財政課長補佐、橋本危機管理課長、築原総務課長、藍沢市民生活課長、脇谷都市整備課長補佐、まちづくり推進課河西主事、矢田秘書政策課係長
【傍聴者】 3名
4. 事務局： **【市教育委員会】** 小野寺教育長、勢井教育次長、花岡教育政策課長、西山学校再編準備室長、河口学校再編準備室係長
5. 概 要： ①開 会
②説明・協議等
・「まちづくり」についての説明等
・「教育内容」についての説明等
・報告書について
・会議録の公開について
③市長謝辞
④閉 会
6. 議事経過： 次頁以降に掲載

【議事経過】

①開会

○勢井教育次長（司会）

ただ今から「第3回小松島市立小学校再編有識者会議」を開会します。本日もよろしくお願ひします。では、次第について確認をさせていただきたいと思ひます。

（資料確認）

議事に入る前に前回の会議録の確認（第2回会議録の確認）をさせていただきます。手元の資料「第2回小松島市立学校再編有識者会議 会議録」に今一度目を通していただき、異論なければ了承ということで考えているので、よろしくお願ひします。

よろしいか。では、ご了承いただいたということで取り扱わせていただきます。

また、本会議は委員11名のうち9人が出席し、過半数の要件を満たしていることから、会議が成立していることを報告申し上げます。

それでは、ここからの会議の進行は前田会長にお願ひします。

○前田委員（会長）

本日の協議については、前回の第2回会議の最後にもお知らせしたが、「教育内容」と「まちづくり」に関する情報の情報交換等をお願ひしたいと思ひます。まず、「まちづくり」について事務局から説明をお願ひします。

②説明・協議等

【「まちづくり」について説明等】

○花岡教育政策課長（事務局）

《資料1「学校再編に関する諸課題」（まちづくり）に基づき説明》

「まちづくり」に関する意見

（まちづくり全般）

- ・反対している人は「地域の灯が消えること」に反対している。賛成している人は「子ども達の教育を良くしたい」というところで賛成をしている。まちづくりの一環としての学校再編でないと非常に厳しいなということを前回、説明会に行って感じた。
- ・教育委員会だけで議論できる問題じゃないだろう。トータルの中で議論しないと、中々この問題の出口は見つからないのではないか。
- ・子ども達が将来「私達はここで結婚して子どもを産んで小学校に通わせたい」と、そういうまちづくりからしていかなければ、少子化問題に歯止めがかからないと思う。

（地域文化の継承）

- ・お祭りとか、どんどん子どもが減っていつている。文化も無くなっていくのかなというのが、寂しいというよりも「無くしていいのかな」と思う。
- ・昔はやっぱり地域のシンボリックな建物だったが、最近はそうでもなくなってきているのかな。避難で

きる場所と機能が備わっていれば、もういいのかなってという声も聞く

(学校跡地の利活用)

- ・街の中心の学校が無くなって、まちづくり、賑わいづくりは果たして出来るのかと思っている。
- ・余った学校をどう活かすのかが明確にならないうちに学校を編成するのはちょっと乱暴じゃないか。空いた運動場をどうするのか。空いた教室をどうするのか。

○前田委員（会長）

今、事務局から「まちづくり」に関する説明があったが、これについて松村委員より情報提供をお願いします。

○松村委員

- ・「廃校施設を今後どう活かすか」というのは小松島市だけで起こっている問題ではなく、日本全国で同じようなことが起こっている。一番それを真剣に考えたのが文部科学省。特設サイト『『みんなの廃校』プロジェクト』で全国の事例を紹介。ただ、過疎地域の小学校が廃校になった後どう活かすかという例がほとんどだった。
- ・京都の烏丸御池にあった小学校も廃校になった。高度経済成長時代に土地の値段が上がり、商用地域としては使えるけども、そこに住民票を置いて生活している人がいなくなり、そこで商売をしている人は街の外側に家を構えて住むようになった。家賃が高騰し、さらにバブル経済が追い打ちをかけ、都心居住は非常に難しくなってしまった。結果、「ドーナツ化現象」が起き、都心の小学校もたくさん廃校になった。東京の銀座の学校もそう。
- ・もう一つのパターンは、日本の人口が全体的に減少していくので、小松島市で課題を抱えているような、市全体の子どもの数が減っていき、憲法にいう「教育の保障」、親が義務教育をするための施設を維持できにくくなったパターン。数が圧倒的に多いのが二つ目のパターン。
- ・お金が入ってくる施設をつくってほしいという要望が廃校のコミュニティからはやってくる。でも、それはなかなかアイデアがいっぱいあるわけではないが、地元の農場とタイアップし、体育館と家庭科室を改良して「生ハム工場」をつくって大々的に売り出したという成功例が紹介されている。
- ・ただ、他所を真似すれば上手くいくというものではまずない。それぞれの小学校区の特徴があり、それに合ったものを地域の人と行政と一緒に考えて考えることが重要。何となく「他人事」のような意見が少しある。「市役所何とかしてよ」と。そういうご意見があるが、実はその地域のコミュニティというのは、自分たちで形成して自分たちで維持していくことが大事。廃校の問題は各それぞれの場所で行ワークショップなどを開設してアイデアを出しながら問題を解決していく必要があるんだろう。
- ・小松島の一つのローカルな話でいろんな方にお伺いすると、保育所、幼稚園、小・中・高が一つの流れになっている。地域でそういうところに行くという認識を皆がやってきたと。小学校を統合する話は、ある意味、棹（さお）をさすことになってしまう。
- ・小学校の運動会は、学校単位で運動会をやっていたと思うが、地域との連携はかなり強いものであったのではないのかなと思う。そこが今度は二つ、三つの学校が一つになるので、時間をかけて新しいコミュニティを形成していくことが必要で、それに向かって市当局は援助していくスタイルになる。
- ・この会議の主催は教育委員会だが、市長部局全体でこのコミュニティの問題は考えていかなければいけない。「まちづくり」の観点で言えば、市長部局全体で取り組んでいただく課題と感じている。

○前田委員（会長）

今の松村委員の情報提供並びに事務局からの情報提供について何かあればお願いします。

○小川委員

一つは「まちづくり」の課題のところ、どうしても施設として残ってしまう、空いてしまう学校をどういうふうを活用していくのかお話をいただいたかと。全国のいろんな成功事例があるけども、このまま市内を見渡すと、たとえば北小松島幼稚園が数年前に休園になって、そこが今ちょうどグラウンドのところの工事が始まったので、そこにあった公民館がそちらに改装してきている。そういう市内の中で上手く空いている施設を活用できている事例もあるのかと思います。

県内の事例にしても、この間新聞で、鳴門の小学校の跡地のところがイチゴ農園になってというニュースもありました。地域それぞれでいろんなできることがあるかと思うので、松村委員が今言ったように、地域の人も交えて話をもっていくという、そういうやり方も重要になってくるのかなって思う。

そういう意味では、小松島の全部が全部かどうかは分からないけども、公民館の単位というのが残っている地域もあるので、旧の小学校区を公民館の単位というのを中心に「まちづくり協議会」みたいなのを立ち上げ、小学校が再編になってくるところがそのまま何も無くなってしまわずに、旧の公民館、旧の小学校区、公民館の単位をしっかりと残しながら、そこを中心にまちづくりをしていきますよというメッセージを事前に出すとか。そういうふうな形で進めていくのがいいかと思います。

本当だったら公共施設全体で考えていかないといけない問題。先月、市の公共施設の再編計画の実施計画が出てきていたが、「かなり古くなったものも廃止していきます」というところが一つ、整理がついたような段階かなという印象を受けました。次の段階はもう少し積極的に、統廃合という形で次の10年後、20年後に向けてそういった段階が次に出てくるのかなと。そのときに向けてしっかり公共施設全体の中で、空いた小学校の施設をどう活用していくのかを、教育委員会という枠を超えて、市全体で考えていかないといけないのかなと思います。

○前田委員（会長）

はい、どうぞ。

○中野委員

私は防災が専門なのでやはり「南海トラフ地震」というのを前提にどうしても考えてしまいます。あと20年くらいの間には南海トラフ地震が来ると考えればその時点で「まちの再編」は必ず出てくる。

たとえば現在、廃校になる予定かどうかは分からないが、11校には浸水の可能性があるわけだから、仮にこれを再利用したり、何か再建するとなっても何らかの被害が発生している可能性があるから、本格的な利用というわけにはいかないというふうには思っています。

そういうことを考え、まずは今それぞれの地域で「何が大事なのか」を考える機会に非常にいいチャンスだと思います。再編計画をする上でコミュニティごとに大事にしているものがあると思うので、それを先程松村委員からもお話があったように、住民と一緒に話し合う場を持っていくことが、最終的には被災後の復興まちづくり計画にもつながっていくことになっていくと思っています。

一方で、私が以前から思っていることとして、徳島県はあまり文化を大事にしない県じゃないかと思っています。住民の方と一緒にワークショップを開いて、このまちのいいところを見出そうとしたと

きに、果たしてそれが見出せるための情報を持っているのかどうか。そこも実は心配な部分。最近特に思うが、各地域の歴史や文化を継承する施設が少ないのではないかということ。

仙台市荒浜小学校というところもご存知の方も多いかと思う。現在、震災校として公開されている施設の3階だったか、荒浜地区の生業の話とか、生活史を展示するコーナーがある。NHKの番組でも「イナサの町」だったか、そういうような番組でも紹介されていた。「イナサ」というのは仙台海岸が少し南西から北東に向かって少し傾いた海岸で、ちょうど南東風が吹くと魚がたくさん獲れるということで、良い風だとされている。そういう風を一つの起点として、そのまちの暮らしぶりを展示している。それを私は観光客の一人として拝見させていただいたときに、「このまちにはこうした文化が息づいていて、そこでたくさんの方が生活をされていたんだ」ということを知った。

そういう施設が徳島県の中にあるかということ、あまりないように思います。小松島市内を考えた場合もなかなかそういう施設に巡り合えない気がします。これは他市でも一緒。徳島県内の博物館で昔の歴史を伝える資料館はあるけども、必ずしもたくさんの方が利用できるような形にはなっていない気がします。

私から提案として、たとえば学校施設の一部にその地域の歴史とか文化とか、そういうものを集積するような資料施設みたいなものができる。それをつくる過程において住民の方が地域の歴史を学んだり、文化を学んだりする機会にもなる。また、学校の子ども達も社会や理科の時間を使ってそういう資料と一緒に読み解くことによって学ぶことができる。そういうことを通して地域の大事なものについての理解を深めるようなことができれば、将来大きな災害を受けて、まちをどういうふうにしていくのかということを考える際にも、貴重な資料になり得るような気がしています。

先程の施設の利用というときに、いろんなやり方があると思います。地域によってその地域にとって非常に大事な文化や歴史を残しておくべきものがあるので、そういうことを中心に活用するような方法もあるし、一方で先程ご提案があったように地域の農業を中心に活用できるような、そういうようなこともあるかと思います。いろんなアイデアがあると思うので、そのあたりは住民と意見交換をする場をつくるということになるが、その際にやはり住民が持っている情報には限りがあるので、行政が持っている情報にももちろん限りがあるわけだが、お互いが持っている情報、あるいはまだ得られていない情報も含めて、たくさんの方の情報を集めた上で協議していくことを是非していただければ、それが次の学校再編にもつながってくるかと思っています。

先程お話があったように、学校再編と言っても、この「まちづくり」という観点からすれば、これはもう全庁的な取組になるので、教育委員会だけではなく、都市整備・土木の部局、それから保健福祉も含めていろんな方と協議をしていただければというふうに思います。

○前田委員（会長）

他に何かあれば。どうぞ。

○秋山委員

「まちづくり」というと少し話が大きくなってしまいが、学校は「地域に開かれた学校づくりを進めていこう」というふうな考えを基本的には持っています。地域の文化・自然・施設、それから人材、「ヒト・コト・モノ」というような言い方をしますが、こういうものを学校教育の中にも取り入れていこうということで、総合的な学習の時間や生活科とかの中で、積極的に授業の中にも取り入れて、「地域の方々

の協力も得ながら教育の効果を高めていこう」ということを一つは進めています。

また、大きな学校行事、先程運動会ということもあったけども、公民館と共催で運動会を行っているところもあります。おそらくずっと以前からいろいろな地域でそれぞれの流れというのがあるのだろうと思うけども、地域のコミュニティの中の小学校として、できるだけそういうのを取り入れながら進めていこうとしているのが学校現場の現状。

○前田委員（会長）

小松島の再編計画が公表されたときにはある一定の方向性が示されていると思うけども、再編によって使わなくなった校舎が出てくるんだろうと。それについてどう思うかという話だったと思うが、その建物は何年もつのか。たとえば中野委員のお話だと「津波が来ますよね」という話。津波が来る、どこでも来ちゃいますねということで、利活用している建物も当然、松村委員が言う津波対策をしておくことを考えないといけない。当然、現行のまま入れ物だけ活用していても、（被災時に）一晩泊まる場所としてそのまま使うのもなかなか難しいところも多分出てくる。

つくってみたものの、実は耐震がもたなくて公共施設としては無理とか。いろんなことが出てくると思うので、基本的な考え方は何人かの先生がおっしゃったみたいな考え方で、再利用についてご検討いただくことはもちろん大事だと思うけど、「建物はきちんともつのか」という問題も片側にはあるので、そのへんを天秤にかけながら考えていただきたいというのが私の考え。

それから、やはり、そのつくってはみたけど全然利用がない、全く利用されないと。そのへんのニーズ調査等々もしておかないと、つくったものはまたそれに対して新たな経費も必要になってきます。

○松村委員

よろしいか。

○前田委員（会長）

どうぞ。

○松村委員

座長先生のおまとめはごもっともだと思うけども、学校の施設というのは、用途が教育の施設でなくなると、とりあえず用途廃止がかかる。その後、行政法用語でいう「行政財産」として、行政がとりあえず一回持つ。それでも用途が見つからなければ、「普通財産」として貸付や売払いの対象になるというストーリーを描いていく。建物そのものがもう使えないということであれば、それは取り壊して、残った土地を貸付けるなりして有効活用すればいいということ。

ただ、それには公の枠組みは外さないといけない場合が往々にしてあります。やはり地域が、言葉は悪いけども、経済的に衰退している現状からすると、地元の方たちは雇用の場を求めたり、経済的活性化を求めたりするというのが自然な流れ。だから、文部科学省が「生ハム工場」を推す。そういう側面があることは事実だが、使えなくなった物を公の建物として維持する話はやはりあまりない話だと思う。

もう一つの観点からすると、廃校になる直前の学校に必ずある物がある。たとえば、部屋で言うと、小学校には理科室と家庭科室。音楽室も。音楽室には必ずピアノがあって楽器がある。こういったものを含めて、やっぱり活かしていく。家庭科室があれば必ずプロパンガスが引けるようになっているので、

それを何とかする。ただ、家庭科室は大抵の場合浸かるところにあります。

県内、小松島だけがこうして議論しているのではなく、あらゆる事例がかき集めたら県内だけでもあ
ると思う。食堂と民宿に変えたのが三好。公民館に変えたところもある。かき集めればいろんなアイデ
アはある。室戸まで行けば水族館。今「文化の継承」からすると、私は具体的にはやっぱり、たとえば
北小松島小学校あたりをしっかりとものにし、小松島市の人達ってやっぱり海とか港湾とか海運にも
のすごく思い入れがある人が多いと思う。「津波来るからバイパスから北に新しいまちづくりをしま
うよ」という意見が通らないのはその理由だと思う。

だから、たとえば小松島の発展した港湾の歴史とか、あるいは和田島の漁業の歴史とか、そういった
ものを集める「海事博物館」みたいなものを。お金は稼げないので公で維持するしかないけども。佐渡ヶ
島の歴史文化博物館で何が並んでいるかという、漁具と農具。一人 200 円取っていたが、それはそれ
でいいんだなと思いつつ、そんな例もある。研究は教育委員会から離れて全庁的にやらないといけない。

ただこれ非常に気になったことがあって、住民の意見は「決める前に先に方針を示せ」という意見が
強い。利活用（の方法）を示して、それが地域に合ったものだと認識できたら小学校の統合に応じるよ
というニュアンスの意見があちこち、二・三か所にちりばめられているが、これは行政としては非常に
厳しいものを突き付けられたのではないかなと。タイムスパン。条件を突き付けられてこれをどう捌く
かはこの会議のアイデアではなかなか難しいかもしれないが、ちょっと論点になっているかなと思いま
した。

○中野委員

一点だけ申し上げたいのは、やはり今全ての学校が重要な避難場所、避難所という形にはなっている
ので、建物の構造体自体は耐震化が終わっているということだと思うから、必ず津波までは維持してい
ただきたいというのが私の考え。というのも、たとえば取壊しをすれば、その前に津波避難タワ
ーのような避難施設を同時にというか、間が空くことなく設置していただければそれはよろしいが、そう
すると津波避難タワーは 100 人規模の津波避難タワーを一つつくるだけでも軽く 1 億円はかかります。
これはなかなかちょっと問題も大きいから、できればわずか 20 年ばかりの話なので、これははっきり
とは言えないけど、それぐらいには来るぐらいの前提で物事を考えないといけないと思うので、維持は
していただきたいというふうに思っています。

そうなる、施設をそのまま放っておかないようにするにはどうするか。住民の方にもそういうご意
見当然出てくるかと思うし、またいずれ取壊しとか、そういうことが起こる場所だとすれば、お金を
かけた運営はちょっと難しいので、先程私申し上げたのは、資料を収集してそれを自由に閲覧をできる
ような場所にする。

ただ、そこにたとえば博物館にすると学術研究員が入ったりすることになって、そこは人が果たして
必要かという問題とか、人件費の問題とか、施設の維持費がそれなりにかかってくるという問題もあつ
て、そう簡単には解決しないので、そのあたり少し、そういうことも含めて「あまりお金をかけないけ
ども、地域の発展に役立ちそうなものとしてはどういうアイデアがありますか」というのをいろいろ議
論するという事かなと思っています。

その点で、住民の方からしてみれば「あまりぱっとしないな」と思うかも知れないけども、ある意味、
かなり暫定的な利用を「この先 10 年とか 15 年くらいの暫定的な利用法を一緒に考えませんか」という
ようなメッセージを伝えながら、議論していただくのがいいのかなと思っています。

○前田委員（会長）

ありがとうございました。

○葛上委員

もちろん、跡をどうしていくのかを考えていくことは非常に大切なことだと思うけど、でもまず「どこが残るのか」という話もまだ決まっていない状況という形があって、さらにそれぞれの敷地をどう活用していくのかということになると、松村委員が言うように、やはり「その地域の方々がそこにどういう願いを持って何をしていくのか」を話し合っていく必要があるのかなあというところがあります。

やはりここでの議論というのは、「まず学校再編」「小松島の小学校をどういうふうに再編していくことが、小松島あるいはコミュニティが良くなっていくのか」というふうな観点で議論をしていく。その結果こういう形で再編されていくであろうとなったときに、廃校になる、休校になる事について考えていくことは「次の話」になるのかなと。そこであまり議論をやっていたとしても、なかなか難しいかなあというところを一つ感じました。

行事にしても、学校行事の運動会とかも、もともと適正規模、小学校で言うと12～18学級というところが適正規模として定められているので、その規模でやると運動会も非常に盛り上がる。他市でも50人の小学校で運動会を地域と一緒にやっておられるが、子ども達からすると盛り上がっているけど、本当の運動会で体験できることとは違うんだらうなど。逆に、小規模だからこそこできる行事であるとか、大規模の300人、400人の学校ではできないような行事みたいなのが本当はできるはずなのに、それを考えていかずに、「運動会はやらなければいけない」みたいな形で何とか維持していこうとする。そういう発想というところも変えていかないといけない部分もあるのかなと。

ちょっと再編から外れていくけども、やはりまずここで考えるべき議論の中心は「教育にとってより良い小学校の再編たるもの」というところがまず決まってから後に、じゃあ考えるとすればどういう関連で考えていく必要があるかというのを示し、それはまた別の有識者会議なりがつくられていくべきなのかなと感じました。

○前田委員（会長）

先程松村委員からもあったが、全てが揃わないとGOサインが出ませんという感じになっている、今は。実際ここで取り扱う内容は「再編をどうするか」「どういうふうにするか」という議論だけど、全てが揃わないとGOサインが出ませんといった考え方になってしまうと、多分もっと大きなユニットで考えないといけない。

それと、どれくらいのタイムゾーンを考えていくか。今日出てきただけでも、再編した後の跡地がどこで、どれくらいもって、どれくらいのたとえば災害が起きたときにどう対応するかといったところまでは、ものすごい長いスパンで考えないといけないというところがあるので、このことについてはもう一度教育委員会だけではなく、市長部局でしっかり議論を重ねてやっていただければと思います。

「まちづくり」のエリアまでは、確かに学校は大事けども、まずタイムスケジュールをしっかり取っていただいて議論をしていかないと、見越すことは大事だけど、50年後考えなさいとかとなると、ちょっとこの会議では荷が重いの、我々が引き受けるものでもないだろうというふうに思います。

時間の都合もあるので、次の「教育内容」についてのご説明を事務局の方をお願いします。

【「教育内容」について説明等】

○花岡教育政策課長（事務局）

- ・「生きる力」の基盤となる「確かな学力」、「豊かな力」、「健やかな体」をバランスよく育成できる環境を準備していきたい。「生きる力」とは、価値観が多様化する時代において、様々な人と関わり合いながら学び、その学びを通じて自分が持つ良さや個性を生かし、生涯にわたり、主体的に行動できる意欲や態度であると考えている。
- ・このような力を身に付けるためにも、集団の中での学びが必要と考えている。今現在、市内 11 小学校中 10 小学校が小規模校で、将来的にはさらに児童数の減少が予測される。学校施設の老朽化も進んでいる。
- ・学校を再編することで、学校間の連携が取り易くなる。「小学校と中学校で最終ゴールを共有し、9年間を見通した教育活動を行うことが重要である」と考えている。

《資料1 「学校再編に関する諸課題」（教育内容）に基づき意見紹介》

- ・1校だけというのに賛成意見もあったが、取り残されているというイメージもある
- ・中学校に行くときびっくりしたのが「こんなにいっぱい人がいるのかな」というのがあって、中学校のときにはじめてすごい衝撃を受けた

○前田委員（会長）

この点についてご意見とか情報提供とかあれば。葛上委員の方からお願いします。

○葛上委員

2ヶ月前、1月に中教審答申（「令和の日本型学校教育」）が出ました。様々なことが書かれているが、「学校再編」ということでも最後のほうに書かれているところがある。一つの方向性として、たとえばそこで出ていた一つの考えがあったとして、たとえば低学年・中学年を分校という形で残していく。高学年は教科担任が、再来年度から実施という形で考えられているところから、教科担任を実施となればある程度の規模が必要になってくる。6年生、高学年というようなところを、たとえば一つの学校に集まっただいて、高学年になってくるとある程度通学も自分でできるということになり、通学距離に関してはある程度対応できるのかなというところもあるので、たとえば一気につくらなければいけない学校規模を最小限にしておいて、徐々に統廃合に向けて進めていくような考え方も読んでいくのかなというところがありました。

低学年・中学年の間はそれぞれ分校という形で学んでいきながら、中学校への接続ということも含めてそういうことも考えていけるのかなと。今「6・3制」というような形になっているけど、「4・2・3」みたいな形の小中の一貫というような形をつくっていくということも、可能性としてはあるかなあと感じながら見させていただいた。

2030年というふうな形で切っていくという形ではなく、できればそういう形でシミュレートしていきながら、どうしていけば新しいつくった校舎に使わないスペースが出てこないようにしていきながら、でもそれぞれが納得して新しい学校に行けるという形も、今回こういう形で答申として出たわけだから、考えていくのも有りかなあというところ。ただ、スケジュール的にそこまでも議論できないところもあるかもしれないけども、少しそういうことも考えられるかなと思いました。

○前田委員（会長）

ありがとうございました。他はどうでしょうか。

○松村委員

地域の意見だけど、中1ギャップの、社会に出たときに本当にいろんな人に出会って、小さいときからそのような環境にいることが大切なのではないか、そのためにも学校が一定規模なかったら、いろんな子どもさんは出てこない。昨日、裁判所が同性婚を認めてはないが、考え方を一定程度示した裁判所の考え方が出たが、そういうふうな世の中が大きく、一言でいえば「多様性を認め合う社会」になりつつある。そういう観点からすると、やはり一定程度の学級規模・学校規模が非常に大事なことだと思います。

非常にショッキングだったのは、もう少し競争環境をつくってやらないといけない。というのは、去年のセンター試験の平均点が出た。徳島県の受験生46位、全国で。これ、何でって。これは先生たちを前に教育が悪いとは言いません。結局は人口が多くないので、競う気持ちがやはりどうしても薄くなってしまふ。だから世界に向けて活躍できる人材を、日本のあっちこっちで、地域でもあるいは都会でも活躍できる人材を創るにはお互い競い合う力というのはやっぱりもってほしい。そういうことからすると、小規模校でやっていくっていうのは、教育内容からしても少し考え方を変えていかなければいけないかなというのが正直なところ。

○前田委員（会長）

私の方からも話したいことがあるので、資料2「教育環境の設定」になる。

私が小松島に関わり始めたのは、今新しく建っている小松島南中学校を開校する前にどんなふうにしなすかみたいところを、相当回数繰り返してやった。再編とか、そういうことをするときにはいつも子どもの数とか、建物とか、そういうもので議論するのが大人の理屈だけれど、特に我々が考えていかなければならないのは何かというと、そこでどういう教育活動を展開していくのか。新しい学校に来ていただいた子ども達は将来どのような力量を身につけて、卒業していくのかということをやっぱり議論なくてはいけないなあということをいつも思っています。

実は法律がいくつか変わり、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」で、市町村の教育に関する議論をしっかり深めて、教育総合会議を設置しながら、小松島は小松島で教育大綱をしっかり設置して「どういう子どもを創っていくか」「どういう教育をするか」ということを努力義務ではなく、やりなさいと。小松島もホームページを見ると出てくる。おそらく先程事務局の方からご説明いただいた内容等が書かれているけれども、厳しい言葉で言うと、似たり寄ったり。学校が再編されていく中で子ども達をどんなふう育てていこうという議論がやっぱりあまりされていない。

つまり本当は、建物がどういうふうになるかとか、学校がどうなるかというよりも、保護者の方が聴きたいのは、そこでどんな教育活動が展開されていくの、新しい学校を創ることによって、どんな新しい力をつけてくれるの、というのが一番の注目課題。ましてや、今年度、ちょうど1年経ったが、コロナ禍ということがあり、教育のやり方、制度そのものが大きく変わる、今までできないだろうなと言っていたことがやらなければいけなくなった。

片側では Society5.0 というのがあって、先程から何回も出てきているが、将来この子たちが大人として活躍していく社会は多分違うことが起きると。よく言われているのは65%くらいは新しい仕事が生

まれてきたり、無くなっていく仕事もたくさんあると。

今回コロナ禍で分かったことは、学校は個がもっている社会的背景にかかわらず、等しく教育を受けることができる制度であり、施設であるということ。インターネットが使えないとか、タブレットがないとか、そういう弊害がなく、誰もが機会均等として学ぶことができる制度だということがよく分かった。学校の内容というものはもう一度考える必要があるかもしれない。

私が言いたいのは、建物は人の行動を制限したり発展させることがあるということ。ショッピングセンターに行くと、ゆめタウン（の中）って曲がっている。あれは先に何があるかなっていう期待感を持たせるためにわざと曲げてある。アウトレットショップなんかいくと、わざわざ曲げて迷路的につくってある。ということはどういうことかっていうと、建物は人の行動を促す機能がある。

そうしたときに、学校を建てるときにはそこでどんな教育活動を展開するか。ここに出てきている課題は、うちの子どうなるんですか、中一ギャップあるんじゃないですかって言われてるけど、じゃあその学校でどういう教育活動が展開されていくのかなあっていうことがちゃんと示されない限り、今度買う車、セダンなのか、ワンボックスなのか、マイクロバスなのか、何か分からないのを買うよじゃなく、こういう教育活動を展開したいのでこういう建物を建てたいと。

今までは学校建築に関しては、建築家さんの方が先走っていることがたくさんあった。文部科学省が言ってる場合が多い、オープンスペースをつくりなさい、昔LL教室があったり、コンピュータ室があったり。ところがその部屋は一向に使われない。オープンスペースつくった学校ではわざわざそれを衝立を立てて小さくして使っている。

つまり、どんな素晴らしい学校を建てても、そこでやろうとしている教育活動が明確でない場合には弊害になる。学校という建物は片側一文字、北側廊下みたいな形になっているけど、どこ見ても分かる、「学校」って見た瞬間に。画一的な教育をしているときには確かにある一定のパフォーマンスを発揮したと思うけど、「どんな教育活動を展開するために、こういう入れ物をつくりましょう」という発想が無い限り、それを地域の方に説明しない限り、地域の方が持っているイメージは片側一文字のあの学校のスタイル。

どこどこをくつつけるという議論も大事だけど、それは一番大事だけど、その中でじゃあどういう教育活動を展開するか。先程文化の話があったり、地域をどうするのっていう話があったり、いろいろ出てくるけれど、それはあくまでも教育に関わることなので、そういうものをどんなふうやっていこうかを考える必要がある。

資料2だが、学校制度はあくまでも方法論。明確に目標を規定しておく必要がある。一番最後に「新しい酒は新しい革袋に入れろ」と書いたが、新しい学校をつくるチャンスのときに今一度、先程から出ている地域のこと、教育のこと、コミュニティのこと、防災のこと、いろんなことをもう一度きちんと明確にしない限りは、数の議論、お金の議論とかでは、多分教育はできあがらない。

小松島南中学校をつくる議論をしていくときに、制服や校章をどうするか議論していたんですが、そのときも教育の目的が明確じゃない形で手段を決定していく形。あのとき一つだけ変わったのが、スリッパ。どっちかの中学校は何色かで、どっちかの中学校は何色かで、じゃあ何色にしようという議論をしていたが、果たして子どもに履かせるのがスリッパなのか。その学校は浸水を受ける地域に建てているけれど、防災教育の観点から「スリッパでいいのか」という議論が全くされなかった。

そこで行われる教育活動を議論せずに学校再編を議論するのは、私はあまりいいとは思えない。そのところをやっぱり議論すべきだなあと。そのとき、どういう方法論を使ってスムーズに、今葛上委員

がおっしゃったような方法も視野に入れながら、どういうふうに移行していくかという考え方を、やはりこれは教育委員会なり、教育に携わる市全体で考えないといけない問題かもしれないが、これは我々大人がしっかり子ども達の方に向かって考えていかなければいけないなあと思います。

坂口委員、どうでしょうか。

○坂口委員

今までいろんな学校建築とか、学校だけに限らないが、やはりどういうことをそこでやりたいか、どういう使い方をしたいのか。たとえば住宅も同じだが、どういうスタイルでそこで生活したいのか、どんな住まい方をしたいのかというのが前提条件。それが実現できるような建物を建てるということが一番大事。特に公共の場合はどうしてもオールマイティに万人受けするようなものをつくってしまうところが非常に多い。最後が予算で括られてしまい、十分なことができなかったっていうことがよくある。

市の教育委員会なり、学校からこの校舎はこういうような使い方をしたいので、それに対応できる施設をつくってほしいというような要望が一番大事かなあと。そこは何かって言うと「こういう教育をしたいので」っていうことが一番なんだろうと思います。校舎に限らず、小学校、中学校ってなかなか選ぶことはできないけど、高校、大学となってきたら、自分が行きたいところとか、自分が学びたいところに進んで行くと思う。小松島で新しく小学校を再編するのであれば、父兄の方がやっぱり「そこへ行かせたいな」って思うようなビジョンをつくっていくっていうのが一番大事なかなって。それがどこの学校へ行くとか、新しく用地を構えるとかいうことは全然関係なしに、新しく再編されるところに親御さんたちがそこへ行かせたい、子どもたちもあそこへ行きたいということが基本に芽生えてくるかなと。今まで出てきている諸課題は、読めば読むほど「そこなんだろうな」と感じました。

○前田委員（会長）

せっかく注文住宅つくらせてくれるって言ってる状態なのに、駅前のマンションみたいな南側にベランダがあって、リビングがあって、6畳間付いていますみたいなものをつくる必要は無いだろうと。せっかく注文住宅つくるといことは、ライフスタイルも、教育スタイルも十分に検討し、本当なら楽しい話のはず。新しいものをつくって、新しい教育をしていくっていうのは、本当は楽しいはずのものなのに、規格化されているものを提供していくという話になると、それはなかなか飲めないっていうのが今の再編の一番大きな課題。

そこをやっぱりきっちり、法律も変わったことだし、大綱の中できちっと10年、20年、30年というスパンの中で課題として取り上げて「こういう課題をクリアしていくために、こういう教育のために、こういう学校のつくり方」ということを、やはりそのことについては教育委員会なり、教育関係者が議論すべきことだろうなど。せっかく楽しいことをやるはずなのに、何か楽しくない話になっていって、どうなのかなと。いつもこういう話をすると思う。何故なんでしょうねっていう話。

小川委員、何かあればお願いします。

○小川委員

今、議論に出ていたことの繰り返しになるが、保護者として「そこに通わせたい」という、それに尽きるような気がしています。私は前に和歌山に住んでいたが、和歌山城のほとりの中学校の周りの小学校3つを再編して「義務教育学校」にするという事業があったけど、その中で、最初は皆さん大反対で、

和歌山で一番古く、市内の政界財界の人たちが皆出ているような学校なので、やっぱり非常に反対が起こった。その中で小中一貫校で義務教育学校にして、今後50年、100年、和歌山で活躍できる人材を育成するという、具体的な内容は忘れたが、やはりそういう教育の方針を明確にしました。

そうすると、反対しているおじいちゃん、おばあちゃん世代の反対はどうなったか分からないが、やはり私ら世代とかもうちょっと若い世代はそこに子どもを通わせたらいいよねっていう。短期的なものとしては、小中一貫でいろんな時間のゆとりがある中で、いろんなことが学べて、たとえば進学校になるという、最近英語とかプログラミングも新しく入ってきた。教育の中でそういう設備なんかも充実しているの、そこへ通わせたいっていう明確なものがあると、そこが人気のエリアになって、その学区に住みたいっていう人が出てくる。そうすると周りの反対っていうのも自然に収まる。

そこからがおそらく次の「まちづくり」の話になるけど、今度は空いてきた小学校、中学校をどうしていくかっていう議論の中で、和歌山市は積極的に、人材が高等教育の段階で外へ流出するっていう問題があったので「市内に大学を誘致する」という方針を都市計画マスタープランの委員会の中で位置付けた。そこに私は専門として参画していました。

先程の時間軸の中で「全部使い道を決めてから再編を」という話だったが、それはやはり決められない。時間軸上どうしても学校の再編が先で、どこが空いてきた、じゃあ空いてきたのを上手く次使って、都市課題をどのように解決しようかという時間軸になってきます。義務教育学校がなっていたから、次も期待して、周りに小学校の跡に大学が来て、若い人がどんどん増えてくると周りの商業も活性化するようになってくる。そういう議論につながっていく。「保護者が通わせたい学校はどういうものだろう」というのはしっかり議論していく必要があるのかなと思います。

○前田委員（会長）

実際、校区とか、たとえば親御さんにとってみれば、自分の家の自家用車があったり、多少よければ自由にしますよっていうときには、子どもの移動性も上がったりいろんなことが起きる。そのへんのところをやっぱり考えながら、固定観念でものを考えていくと「ここは減ってきますよね」とかいうのではなく、それぞれが新しい学校をつくっていく中で、きちんと「こういう教育成果について保障していきます」と。「それについてきちんとやっていきます」と。「そのためにこういう校舎が必要です」というような枠組みを早く示してあげないと。

教育に夢がないという感じが今ものすごくするので、そののところをもう一回考えてみる必要があるんじゃないかなあと思います。

実は本当はここが一番重要な課題かなと思います。学校の話なので。そういうことを十分議論していく必要があるのかなあと思います。

○前田委員（会長）

【会議の総括】

令和元年 12 月に出された学校再編実施計画（案）について住民の方にいろいろなご意見を伺ったところ、いろんな課題があるので有識者会議という形で再度検討しましょうというのが、この会の設置されていた意味だと理解しています。いくつかの観点で議論を重ねてきた。

防災に関しては中野委員から、どこでも浸水するよと。3階建て以上の校舎を建てればいけないかという話が出てきたり。ただ津波だけではなく、東日本のように津波火災もあったり、いろんなことについて考えていただきたいということ。

都市計画のところでもマスタープランが出たが、南小松島小学校駅周辺が市街化区域に入り、新開小学校は少し調整区域に入るけども交通の結節点として重要になってくるとか。通学距離の最小化、要するに通いやすい学校をつくるっていう、アンバランスさはあるけれども、学校をまちの中心に置くことでバランスもとれてくるんじゃないかっていうご意見だったかと思います。

通学に関しては、保護者の義務負担と通学支援という観点から支援内容を決めていく必要があるということと、計画ができあがればバスは対応できるというようなコメントであったと思っています。

建築方法については、混雑するのではないかとか、場所は大丈夫なのといった意見もあったと思うが、道路事情とか、スクールバスに関する視点でも見解をいただいている。工夫次第によっては建てられるのではないかと。工期の問題とかいろいろな問題があるが、工夫次第でできるだろうと。

それから、確かに高校があったり、小学校があったり、いろんなことで混雑するんですけども、そこをお互い協力し合いながら、バス停の場所を変えてみたり、家から、バス停から学校の直前まで行かなくてもいいんじゃないのと。手前で渋滞緩和なり混雑を解決する方法があるんじゃないのかというふうに議論いただいたと思っています。

建築に関しては、先程の話と重複するかもしれないが、1階はどうしても津波被害等も起こる可能性があるんで、子どもが常駐しないような形で、2階以上に活動の場所を置けば大事なんじゃないかとか。ここでも、津波火災とかについてはもう一回出てきたかと。

それから、道路事情については、これも工夫次第だけでも、スクールゾーンというところから、時間制の一方通行をやってみたり、いろんな工夫をすることで、送迎ルートを変えることによって緩和できるんじゃないかとか。教職員の駐車場を別のところに置いたり、そんなことによって解消できるんじゃないかというご意見をいただいた。

スクールバスについては、バスロケーションシステムとかいろんな制度があって、保護者の方が安心できるようにすることも可能である。コロナの話もあったけども、換気は確か3分くらいでできるというようなこともあって、伝染病等に関してもきちんと対応できるのではないかと。

まちづくりについても議論させていただいたが、確かに学校をつくることはまちづくりの中の根幹の部分を示すものではあるけども、それについては少し余裕を持ってステップ・バイ・ステップでいかないと、この話は「全てが補完した形で結論を出せ」というのは難しいと。それも含めて、実際まちづくりなり、学校づくりとか、小松島の子ども達の将来を描きながら、教育内容についてはきちんと議論していく必要があると。保護者の方が行きたくなるような学校づくりをするということが本来の学校づく

りで一番大事なことなのではないかと。せつかく新しいものをつくるのに、夢のある話なんだから、もっと夢の部分をきちんと議論する。それにどれくらいお金がかかるかということになってくると、また厳しい問題もあるけども、建築家の力をお借りして、安上がりで効率の高い建設物をつくっていただくということで対応できないかなあと思ったりしています。

以上、皆様のお話からすると、事務局から提案された現行案に対する課題はここにあるけども、概ね解消されるのではないかなあというふうに思うけども、ただ問題はどれくらいのタイムを使って再編を進めていくかという問題。1回目の会議で出てきたのは、学校をつくっていく中で、やはり人口が減少していくことの歯止めまではなかなか難しいだろうと。その中で一番無駄がない、再編のあり方というものを検討する必要があるのではないかなあと思ひ、今日この資料3のペーパーをつくってもらった。

このペーパーでは結論にあるのは、「検討結果」ということで時期も確定されているように、第4段階というところで「再編時期・規模」と書いているが、実際果たしてそれが適正なタイムスケジュールなのかどうかということも、このペーパーだけでは難しいかもしれないが、もう一度考えてみる必要があるのではないかなあ。

実際、たとえば2040年、令和22年、まだ令和始まったばかりだが、20年後くらいにどうなっているか。現行の学校規模はこのようになるけど、一番コストがかからない形でやっていくにはどうすればいいか。果たして今示されている2030年のところで4校なりの方法でいけるのかどうかということも、もう少し考えてみる必要がある。

その前には「教育内容」についても考えていく必要がある。跡地利用とか、校舎の再利用とか、そのことについてもやはり視野には入れていく必要があるだろうと。淡路島の「ノジマ」のようなものもあるが、あそこは廃校にした後レストランになってたくさんの人が来た。夕日がきれいに見える。小松島は朝日かなって思うが。そういうものもいろいろ考えていく必要がある。そういったこともいろいろ研究する時間がまだあるのではないかと、というのが皆さんの意見ではないかなあというふうには思います。

市民の方から先程から出ているのは、こうすると個別の案件についての課題はたくさん出てくるけども、「うちの子どうしてくれるの」というのがやっぱり見えてない。何を見させていくのっていうところがやはり明確ではないので、そこに行きたいとは思わないので。

実際は今、車を売っている状態で言うとカタログもなく、パンフレットもなく、車を誰かに買ってもらうとしているけども、そうなるとうっかりその車を持ったらどんな夢が叶うかっていうところを力説していく必要があるのではないかなあ。制度も変わってきているので、地方教育行政の組織が変わったり、総合教育会議を設置しなさいとか、それらに対して地域住民の方にきちんと説明しなさいと、こういうふうに法制度が変わっていくので、そういうものを活用しながら、広く市民の方に「どこをどう整備するか」ではなく、「どのような教育をしたいか」ということについてやはり広く意見を述べる必要があるのではないかなあと思っています。

これを一応この会議の総括とさせていただきたいというふうに思っているが、皆様のご意見をお聴きしたい。いかがか。よろしいか。

【その他】

・報告書について

○前田委員（会長）

最終的にこの会議の報告書を作成させていただき、提出させていただきたいと思うが、まとめ方に関して私の方に一任させていただいて、皆様のご了解もいただくけども一任させていただいてもよろしいでしょうか。

－ 委 員 －

（異議なし）

ありがとうございます。できたら事務局を通じ皆様のところに一度お返しし、ご確認をいただきたいと思いますので、対応をお願いします。

・会議録の公開について

○前田委員（会長）

続いて、会議録の公開について事務局より連絡があるので、事務局で説明をお願いします。

○花岡教育政策課長（事務局）

会議録については、本日の第3回会議を終えると、ひとまず、全ての会議録を作成することができまので、事務局の方で、市の情報公開条例がいう「意思形成過程情報」等にも注意しながら、後日ホームページ上に掲載する会議録の要旨を作成したいと考えています。公開時期については、現時点では未定であるけども、第3回会議での皆様発言内容を確認させていただき次第、速やかに作成し公開に向けて事務を進めてまいりたいと考えていますので、よろしくをお願いします。

○前田委員（会長）

この会議が最初非公開だったのが公開されたり、いろいろ二転三転した部分があるけども、広く市民の方にも知っていただくというのは非常に重要なことだと思うので、事務局の方から説明していただいたとおりで良いかなあとと思いますが、皆さんいかがでしょうか。

－ 委 員 －

（異議なし）

これで予定していた議事は以上になります。意味がある議論ができたなあというふうに思っています。どうもありがとうございました。では、進行を事務局にお返ししたい。

○勢井教育次長（司会）

3回にわたり貴重な御意見、本当にありがとうございました。

では市を代表し、市長から委員の皆様方に謝辞を申し上げます。

市長謝辞

○中山市長

小学校再編に係る有識者会議の締めにあたりまして、小松島市を代表いたしまして、一言、委員の皆様にお礼を申し上げたいと存じます。前田会長様、また、中野副会長様をはじめ委員の皆様におかれましては、先月に開催いたしました第1回会議に引き続き、今月は2回の会議の開催という非常にタイトなスケジュールの中、たくさんの貴重なご意見や情報提供などをいただきました。本当にありがとうございました。心より感謝を申し上げたいと思います。

この度の有識者会議におきましては、具体的な事例の紹介等をお示しいただき、到底我々だけでは気づくことができないような新しい視点や考え方などを専門家のお立場からご教示をいただきました。その有識者会議でご協議いただいた内容を、今後の学校再編の参考にして、小松島の学校教育のあり方を念頭に置きつつ、教育委員会と市長部局、全庁挙げて、小学校の再編を進めてまいりたいと考えております。

小学校の再編を考えることは、まちの未来を考えることにもつながりまして、先程前田会長よりお示しいただきました、明確な教育方針、そして夢のある教育、それが保護者が通わせたいと思っていただけるような学校をつくること、そのことによりまして、若い人たちが、私たちのふるさと小松島を誇りに思い「小松島の学校で学んで良かった」「小松島に住んで良かった」と思えるような、未来の子どもたちのための学校づくり、まちづくりに、しっかりと未来を見据えて取り組んでまいりたいと存じております。

委員の皆様におきましては、今後もさまざまな場面で、引き続きご意見をお聞かせいただくこともあるかと存じます。今日で有識者会議は終了するわけですが、今後とも小学校再編に係るご意見は勿論のこと、小松島市の行政全般に関しましても、忌憚のないご意見をいただけましたらありがたく存じます。本当に充実した有識者会議を3度にわたり、大変お世話になりました。

結びに委員の皆様、今後益々のご健勝・ご活躍を心よりご祈念申し上げまして、私のご挨拶とさせていただきます。本当にお世話になり、ありがとうございました。

○勢井教育次長（司会）

第3回の会議録の確認は後日メール等でさせていただきたいと思うが、そのようなことでよろしいか。

－ 委 員 －

（異議なし）

ありがとうございます。ではそのように取り扱わせていただきます。

③閉会

○勢井教育次長（司会）

以上をもって小松島市立小学校再編有識者会議を閉会させていただきます。

ありがとうございました。